特別支援学級に在籍する注意欠陥多動性障害と自閉症の診断を受けている小学６年生の児童が交流及び共同学習を行っている事例

１．事例の概要

Ａ児は、Ｂ小学校の特別支援学級に在籍する、注意欠陥多動性障害と自閉症の診断を受けている小学６年生である。本事例は、Ａ児が通常の学級で交流及び共同学習を行った事例である。

Ａ児は知的な遅れはないが一斉指示が通りにくいため、活動に集中できるように、付箋に順序立てて活動と課題を提示していくことで、自分が何をすべきかを理解し、他の児童と一緒に活動することができるようになってきている。また、周囲の児童がＡ児をサポートすることで、集団での行動もできるようになりつつある。

キーワード　感情のコントロール、クールダウン、集中力の持続、手順書

２．児童の実態

Ａ児は、Ｂ小学校の特別支援学級に在籍し、注意欠陥多動性障害と自閉症の診断を受けている小学６年生である。小学５年生から特別支援学級（情緒・自閉）に在籍している。小学３、４年生時は通級による指導を受けていた。Ａ児は知的な遅れはないが、集中力に欠けるため一斉指示だけでは何をするべきかがわからず、困っている様子がみられる。また、自己肯定感がとても低く否定的な言葉を言うことも多く、取り組む前から諦めてしまいがちで集団で活動することができない等の課題がみられる。

３．本事例に関する基礎的環境整備

○　Ｂ小学校では、特別支援教育コーディネーターを１名指名している。また、通級による指導担当教員から、支援の助言を受けられるようになっている。【基礎１】

○　特別支援学級のある建物に、「小さなおうち」と呼ばれるいつでもクールダウンできる場所を用意している。また、相談室を設け、他の児童とのトラブルがあって、気持ちが落ち着かないときは、相談室で話を聞くようにしている。【基礎５】

○　Ｂ小学校には、特別支援教育支援員が配置され、担任と連携し、適宜支援ができる体制になっている。また、合理的配慮協力員が在籍し、一斉授業の中でのＡ児の様子を見て、相談をする機会を設けている。専門性の高い教員が保護者の相談に応じることで、安心感へとつながっている。【基礎６】

○　特別支援学級では、国語・算数を学習している。Ａ児が苦手な算数は、Ａ児のペースで行うことにより、学習の定着が進み、Ａ児の自信にもつながっている。保護者、特別支援学級担任、通常の学級担任が話し合い、柔軟に学びの場を確保していけるようにしている。【基礎７】

４．合意形成のプロセス

Ａ児、保護者ともに学習へ困難さを感じ、３年生から、通級による指導を開始した。その後、Ａ児の学習への意欲と、集団への適応力や自己コントロール力を高められる

ような配慮を受けながら過ごさせたいという保護者の願いがあり、５年生のときに特別支援学級へ入級した。コミュニケーション能力や社会性の向上を目指して、これまで築き上げた交友関係の基盤がある通常の学級での交流及び共同学習を実施している。特別支援学級の担任が個人面談等の場で、学習を進める上での合理的配慮について、具体的な内容を保護者に説明しながら合意形成を図っている。

５．合理的配慮の実際

写真１　サッカーの手順書

○　Ａ児は見通しをもてると、安心して行動できるため、体育のサッカーの授業の際に、１時間の練習の流れがわかる手順書（写真１）をチームに一枚配布している。何をどのような順で行うかが具体的に書いてある手順書を見ることで、次に行う練習がわかりチームの一員として不安なく活動に参加することができている。【合理①－１－１】

○　理科の実験では、事前に実験内容を伝えて教員と実験を試してから、他の児童と一緒に取り組むようにしている。事前に実験を試してから臨むことで、落ち着いて学習することができている。【合理①－１－２】

○　初めてのことやできないことに対しての不安感が強いため、体育の授業でダンスに取り組むときには、通常の学級でダンスの振付を見た後に特別支援学級で担任と振付を確認し練習することで不安を解消するようにしている。【合理①－２－２】

○　Ａ児の感情コントロールが上手くいかないときには、特別支援学級の担任だけでなく、通級指導教室担当教員にもＡ児の話を聞いてもらえる機会を確保している。Ａ児自身が、何がいけなかったのか、どうしたらよかったのか、など具体的にイメージして考えることができるように指導している。【合理②―１】

○　大型テレビに注目する部分を映すことにより、集中して授業に取り組むことができるようになっている。【合理③－２】

６．本事例の成果と課題

交流学級の担任がＡ児に対して通常の学級の児童と同じ場で学ぶクラスの一員だという姿勢で関わる様子をみて、交流学級の児童もＡ児のことを温かく迎える雰囲気ができた。交流学級の児童の理解が進むにつれ、Ａ児自身も「自分も他の児童と同じようにもっとやりたい。」と意欲的に活動し、「自分にもできる。」という自信も生まれてきた。また、Ａ児は徐々に感情のコントロールができるようになり、気持ちを落ち着かせることができるようになったため、学習面においても集中して取組むことができるようになってきている。大型テレビなどを活用して注目する部分を映すことにより、注意が散漫になりやすいＡ児も集中して学習を続けることができてきている。

課題としては、特別支援学級と交流学級の担任の連携のみならず、教職員間での理解・啓発、情報交換等があげられる。また、Ａ児の中学校への進学に当たり、小学校で築き上げてきた対人関係が変わることで、新しい環境に適応できるかが大きな課題でもある。個別の教育支援計画の引継ぎを行い、中学校との情報交換を丁寧にしていく必要がある。